SPEED STAR

Machine Sports Autorace オートレースを100倍楽しむヒューマン・ドキュメント・マガジン 1998 Jan Vol.4

黒潮列伝

片平 巧

特観席 赤井英和さん

THE ROOKIES 伊勢崎編

誰もが認めるオートの最速レーサーの登場である。
しかしながら片平は、晴れ走路での圧倒的な強さともに
雨走路でのもろさをあわせもった、言うならば
〈苦手種目〉を残したまま頂点に上りつめた、希有なチャンピオンだ。
片平巧の伝説は、まだ、始まったばかりなのかもしれない——。

片平 巧

TAKUMI KATAHIRA

●片平　巧（かたひら・たくみ）
船橋オート所属・19期。昭和40年6月14日埼玉県生まれ。167cm、51kg。日本選手権の優勝3度をはじめ、SG戦10V（'97.12.20現在）を達成。平成6年にはオート史上初めて年間特別または記念レースでの全場優勝を記録。次々とレコードを樹立する、オートレース界のスーパースター。趣味はゴルフ。

TAKUMI KATAHIRA

タイトルを獲ったとか獲らないとかじゃない。あいつがいちばん速いと思われたいんだ。

ひとりだけハンデを背負って後ろから走るということ。

1997年1月29日、川口で行われたSGスーパースター王座決定戦の優勝戦で、〈事件〉は起きた。11回を数えるスーパースター優勝戦で初めて、片平が単独10ハンに置かれたのだ。結果、片平は見事に7車抜きでスーパースター戦3連覇を果たし、このハンデが正しかったことを証明してみせた。1200万円もの賞金のかかった選手としては、どんな思いがするものだろう。

「この世界に入った当時から、ひとりだけ後ろから走っていくというのは目標だったんです。普通の開催であれ、SGであれ。

今まで一般開催は後ろから走っても、SGの優勝戦は同ハン（という不文律）でずうっとやってきたわけですけど、それを、SGでも後ろから走らしたってことは、今までの人たちよりも評価が高いということだと思うので、やっぱりうれしかったですよね。勝ててなおさら、ですけどね。

ただそれが10（m）後ろだったから妥当かなと思いましたが、例えば20後ろとか離れたらちょっと…と感じたかもしれませんね」

実はこのレースの直前、片平はインフルエンザにかかり、38度の発熱を起こしている。繰り返し点滴を受けながら4日間を戦い抜き、決勝のゴールに飛び込んだ時には、歓喜ではなく安堵感に包まれたという。

「レースに勝って、うれしい時と、ほっとする時とがあるんです。

勝てないんじゃないかと思っていたのに勝てたときは絶叫とともにゴールに飛び込むような、すごい歓びがあるんですよ。

そうではなくて、走る前に勝てそうな時、自分のほうが仕上がりがよくて取れそうな時は、うれしいよりも、ああ取れてよかったな、となる。チャンスはなかなかめぐってくるものじゃないし、今回チャンスと思うと、勝たなきゃいけないというプレッシャーがかかって、それでほっとするんでしょうね。

スーパースター戦はマシンの仕上がりもよかったし。体調にしても長年のレース経験で、7度台の熱まで下げればいける、と思ってましたから」

勝てて、ほっとすることがある。そこには確かに、トップレーサーとしての強烈な自負が隠れている。

来てくれたお客さんに、面白いレースを見せてあげたい。

SG戦優勝はすでに10回を数える。2年連続の賞金王、3年連続の最優秀選手賞獲得など、片平のバイオグラフィーには既に絢爛たる記録が残されている。

例えばSG第一回東西チャンピオンカップの優勝インタビューでの「（高橋）貢クラスの選手があと2、3人でてきてほしい」という発言には、そうした記録に裏打ちされた自信を感じるのだが、片平に言わせると、

〈ペン〉高速走法〉と呼ばれる片平の走りは、その走りを初めて目のあたりにした新人をして「絶対曲がれないというところを曲がっていく」と驚嘆させる。その感想を片平にぶつけてみると、「たぶんそれは技術の違いではなく、自分のイメージしている走りと皆がイメージしている走りの違いじゃないかな。皆は〈マシンを〉寝かして曲がろうとするけど、自分は起こして曲がろうとしているから」と、こともなげな返事が返ってきた。

それはむしろ自らの気質からでた言葉らしい。

「32歳になってやっと自分の性格が分かりだしたんですけど、なんかね、ものを考えるときに自分のことでもなんでも客観的に見ちゃうんですよ。で、自分がオートレース界でがんばってて、自分が評価されることも大事だけれど、オートレースというものが評価されることも期待してしまうんです。

そのためにも来た人に面白いレースを見せてあげたいという気持ちが強くて、それにはやっぱりトップレベルの選手が何人もいたほうが面白いと思うんですよ。そういう意味で、彼（髙橋貢）の名前をあげたんです。やっぱりベテランの選手よりも若手のほうが可能性があるわけでしょ。だからどんどん若い選手に成長してほしい。それが自分の励みにもなりますからね。

違う言い方をすれば、活気のある職場にしたい、ということかな。活気のないところって人が集まんないって思うんですよ。それって自分の考えることじゃないと思うんですけど、そういうことを考えがちなんです（笑）」

片平を脅かす次世代レーサーの最右翼にいる、当の髙橋貢について聞いてみた。

「まず走りが、ほかの若手にないスピード感があるじゃないですか、グリップの開けもいいし——。開けようとしている人はいっぱいいるんだけど、あいつは開けて、車を前に進めるのがうまい、と思うんですよ。見てて気持ちがいいし、あと精神的にもかなり強い面ももっているし、全体的に見ていて、いさぎいいですよね」

雨で速く走りたいと思わなかった。そのツケを5年で取り戻す。

もしオートレース場がドーム式の競走路になれば一昨年逃したSGグランドスラムも軽々と達成しそうなほど、晴れ走路では神がかった走りを見せる片平巧だが、一転雨のレースになるとあっけないほどの負け方をしてしまうことでも有名だ。昨年のSGでも、全日本選抜の決勝で8位に沈み、オールスター戦では予選3日目・単独10ハンで臨んだレースで5位となり準決勝進出を逃している。

「雨はね、やっぱりまだぜんぜん競走レベルまで達していないんですよ。苦手意識も持っているし、克服できないんですよ、いまだに。

自分で分析すると、デビューする前から、雨の日にやるオートバイレースって観るのもするのも好きじゃなかったんです。雨で速く走りたいと思ってなかったんですよね、ずっと。で、若手の頃からあまり、晴れと同じようには取り組んでこなかった。で、後になって必死に練習したりしはじめるんですけど、なかなかそれまでさぼってたぶんが取り返せないっていう感じですかね。さぼってた期間？うん、8年くらいか…（苦笑）」

練習も整備も理詰めに追求するという片平だが、雨について話す彼は、それまでの徹底してクレバーな表情の隙に、居心地の悪そうな、はにかんだような笑みを時折浮かべる。

「雨を克服するのは、まず意識の問題ですよね。苦手意識を克服すること。

それと結局なぜ走れないかというとタイヤがすべってグリップしないからで、そのへん雨の日にどうエンジンやフレームをセッティングしたらいいか、きっかけがまだつかめていないんです。

晴れでさえセッティング覚えるのに7年とか8年かかってますからね。ましてや雨は年間10レースとか15レースでしょう。だからなかなか前に進まないんです。なんか覚えたかなあと思うと3、4か月雨が1滴も降らないとかで、たまには水まいて練習させてくれよと（笑）、今は個人的に思うんですけど。

あと5年くらいで乗れるようになればいいかなと思います。ま、気持ちとしては明日にでも乗りたいんですけど、なかなか現実は厳しいですから」

目標は、記録ではなく、最速の記憶を残すこと。

今回のインタビューは、関東が久方ぶりのしっとりした雨に包まれた11月13日、片平のホームグラウンドである船橋オートレース場にて行われた。1週間後に日本選手権を控えた片平は、シンと静まりかえったガレージで、エンジンの部品を全部取り替えるという、ドラスティックな整備に取り組んでいた。

「選手権は自分がこのオートレース界に入ったきっかけでもあるし、1年でいちばんがんばりたいレースなんです。

昔の話ですけど、高校中退してアルバイトしてて、お金もないし、その時に1分何10秒で1千4百万もらえるレースがあるんだって聞いて、この世界に入ったんです（笑）。ねえ、ふつう何年仕事したら1千4百万になるのか。とんでもない仕事だなと思って。そのレースが日本選手権だったんです。

ただ、最近思いが強すぎて、逆にプレッシャーになってるかなという気もするんです。それをもう少し楽しめるようにしたい。日本選手権に参加できること、レースをできることに歓びを持ちたいと考えています」

百戦錬磨の片平にして、選手権を前にしての昂ぶりを冷ますのは容易ではないらしい。

最後に、選手権への意気込みをかねて、トップレーサーとして片平が〈どうしても譲れないもの〉を尋ねてみた。

「単純ですけど、いちばん速く走りたいということです。タイトルを獲ったとか獲らないとかじゃなくて、あいつがいちばん速いと思われたい。お客さんが自分の眼で見ていちばん速く見えるっていう——。レースには運・不運が必ずある。たとえ勝てなくても、いちばん速かったと思われたいんです」

11月21日から伊勢崎で開催された日本選手権は、オートレース界にとっても、片平自身にとっても〈次の時代〉の胎動を予感させる結果に終わった。

決勝戦をぶっちぎりの独走で制したのは髙橋貢。準優勝は畑吉弘。いずれも片平の次の世代だ。

片平は大胆な部品交換によるエンジンの出来を「不安も無限大だが可能性も無限大だ」としていたが、遂に最終日まで仕上げきれなかったようだ。しかし、初日・二日の雨走路を2着・3着と激走。〈雨にも強い片平〉への思いをアピールしてみせた。

決勝での片平の試走タイムは、髙橋のそれより0.04秒遅く見劣りしたが、一番人気は片平のものだった。ファンは、たとえ戦いに敗れても片平がいちばん速い男であることを、知っている。

ロッカーで赤橋貢選手の「ウルフ」に跨って。
この数時間後、このマシンが優勝戦のゴールをトップで駆け抜けることになる。

●赤井英和さんの巻

僕の身体にはいまでもファイターの血が流れてる。その血がオートと響き合うんですね。

サービス精神旺盛な人だ。インタビュー前にロッカーの見学に誘うと「ロッカー？見てみたいなぁ。いきましょ、いきましょ」と真っ先に駆け出して行き、そこにいた知り合いの髙橋選手（伊勢崎22期）を見つけて握手したり、肩を抱いてカメラの前でポーズをとる。他のゲストにない積極性は、オートレースのCFキャラクターとしての自覚からだろうか。

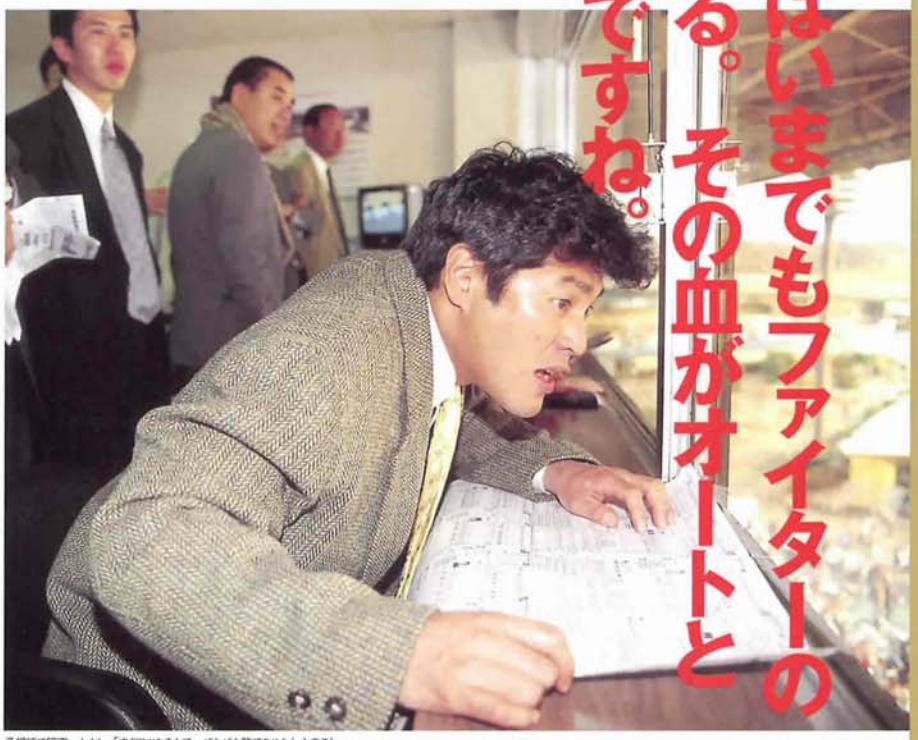
＊　＊　＊

赤井英和さんがオートレースの顔となって2年目。残念ながらまだまだ知名度の高くないオートレースを、テレビ画面で孤軍奮闘、アピールしてくれている。ただし、CFで熱狂的な声援をあげる姿は、決して演技ではないという。

「オートレース、見てたら燃えますねぇ。あってはいかんことですけど、万一事故とかになればもしかしたら大ケガするかもしらん。それを承知で命を張って突っ込んで行くゆうのが、なんか見てて熱うなりますね」

赤井さん自身、プロボクサー時代の85年、2度目の世界タイトル前哨戦でKOされた際、頭部を強打して脳内出血の重体で生死の境をさまよった経験を持つ。それだけにこの言葉の持つ意味は重い。

「僕の身体の中にまだ熱い血が流れてて、その血がこのオートレースのものすごい排気音と響き合うんですかね」と言うが、今ではもうボクサーとしての赤井英和を知るファンは多くない。そうただすと「僕は、いまでもファイターです。生まれ変わっても絶対もういっぺんボクシングやりますよ」と強い調子で言い切った。その目は、確かにテレビ画面で見慣れた俳優のそれではなかった。



予想紙で研究。しかし「すぐアツなるんで、ぜんぜん勝てません」とのこと。

＊　＊　＊

ところで、この日はオートレース日本一を決める「SG第29回日本選手権」の最終日。優勝戦の狙い目を聞いてみた。

「う～ん。やっぱり髙橋さんで行かなしゃぁないやろ」という貢選手とはテレビCFで競演した仲。だが予想紙で選手の顔写真を見ながら、「しかし、優勝戦に出てくる選手はやっぱりどの人も一流の顔してはりますなぁ。こういうのん見てたらまた迷うがな～（笑）」

そんな赤井さんの迷いを尻目に、結局この日の優勝戦では髙橋選手が圧倒的な走りで片平（19期）・島田（11期）の船橋勢を抑え、優勝賞金2,300万円をさらうと同時に年間賞金王レースのトップに躍り出た。

ファイター赤井のとびっきり熱い大声援が、きっとサーキットに届いたのに違いない。

（あかい・ひでかず）
1959年8月17日生まれ。高校時代にボクシングを始め、インターハイ、アジアジュニア選手権に優勝。近畿大学在学中モスクワ五輪の有力候補だったが日本のボイコットでプロの世界へ。プロデビュー後12連続KOの日本新記録を樹立するが世界タイトルの前哨戦でKO負けを喫し引退。その後芸能界へ転向し、映画「どついたるねん」で主演後、大河ドラマから舞台、週刊誌の連載エッセーなど多方面で活躍中。

THE ROOKIES

出てこい、次代のニュー・ヒーロー!!

伊勢崎オート・第25期生

出来過ぎた先輩たちは後輩にとって幸か不幸か。スターの座に駆け上がるその眩しい後ろ姿を、14の熱い眼差しがじっと追い続ける。

オートレースのトップタイトル『SG第29回日本選手権オートレース』開催地、伊勢崎オート。優勝戦では高橋貢選手(22期)が完勝し、88年の田代祐一選手(15期)以来9年ぶりにこのタイトルを地元伊勢崎にもたらした。伊勢崎では浅香潤選手(23期)など20期以降の若い先輩の活躍がめざましい。もちろん、田代選手に代表される中堅勢も依然として健在だ。優れた先輩たちの存在は、刺激にもなり勉強にもなることが多い半面、一般開催のレースでも新人にはなかなか勝たせてもらえないという現実をも意味する。ここ伊勢崎には25期生としては最多の7名の新人選手が配属。全員が地元群馬県の出身だ。デビュー2年目を迎えてなかなか出せない結果に、焦りながらも奮闘する上州の若き7人の侍。彼らの前方を走る先行車の影は、まだ遙かに遠い。

●写真左より

1.北渡瀬充(きたわたせ・みつる)
群馬県出身。22歳。地元伊勢崎の出身。オートの排気音を子守歌代わりに育った(?)とか。一番印象に残っているのは「養成所の所長が観戦していて勝てたレース」。選手権の開催中、船橋の片平巧選手と宿舎で同室だった。「そこに高橋選手が遊びに来て、二人で話すのを横で聞いていたんですが、なんだか僕なんかと次元が違いすぎてよく分かりませんでした」と笑う。新人選手としては珍しくホームページをもっている。

2.岩沼靖郎(いわぬま・やすお)
群馬県出身。21歳。1着14回は97年11月現在伊勢崎の同期では最多勝利。それでも本人は「まだまだ、全然ダメです」と、少し贅沢な自己採点を下す。「とくに同期2人と一緒に走って負けたのが一番悔しかった」。課題は明確だ。「僕、日本一スタートが遅いオートレーサーなんです(笑)」と妙な自慢をする。一方で「他場の同期ではもう優出している奴もいるから」と、しっかり次のステップを狙う意気込みをうかがわせた。

3.深澤　悟(ふかさわ・さとる)
群馬県出身。21歳。「この世界に入る以前には原付を含めて二輪に乗ったことはなかった」という彼が、レース場で選手募集のポスターを見て兄と一緒に受験。彼はオートへ進み、兄は競輪選手として今秋デビューを果たした。デビュー8ヶ月で8勝。雨天路では1勝もない。走りでも整備でも克服すべき課題は多いが、同期だけでなく同じ公営競技に進んだ兄をもライバルにして、闘志を盛り立てているようだ。

4.中野光公(なかの・みつひろ)
群馬県出身。24歳。「スタート直後はよくても、最後の6周目までスピードに乗れない」という自己分析が当たっているのだろうか、これまで1着が5回。今後の走りの目標は「やっぱり高橋貢さんのスピード」と、躊躇なく2歳年上のトップレーサーの名をあげる。ただし「あの人は天才だから、追いつくのは無理だけど…」と謙虚なセリフの後で、「自分も後輩の目標にされるような選手になりたい」と、野心もチラリと覗かせた。

5.柳　泰樹(やなぎ・やすき)
群馬県出身。24歳。デビュー第2戦で落車。以来波に乗れず、いまだ勝ち星に恵まれない。「ウチ(伊勢崎)の先輩たちは、みんな速いですから」と、自嘲気味に苦笑する。昨秋にはそれまでの愛機を見限って先輩から譲り受けたマシンに乗り換えた。ゲンをかついででも「まずは一勝」を期す。「来年はオヤジ殺しをやりますよ」といいながらニヤリと微笑んだとき、耳のリングが不敵に揺れた。

6.永井秀樹(ながい・ひでき)
群馬県出身。24歳。デビュー以来46戦で1勝。思うような結果が出ていないせいか、取材に答える口も重い。「二輪には学生時代から乗っていて、(オートは)周回を回るだけだから簡単そうに思えたんだけど…」と言葉を濁す。ただ、戦績を見ると1着は1回でも2着は9回もある。決定力不足は否めないにしても実力が大きく劣るわけでない。彼が陽気にインタビューに答えてくれるようになるのも、そんなに先のことではなさそうだ。

7.笠原　修(かさはら・おさむ)
群馬県出身。23歳。伊勢崎の同期中最も長身。ひょろっとした体格と柔和な表情が印象的だ。養成所時代にケガを負い、デビューが他の同期生よりちょうど3ヶ月遅れた。自分では「まだまだ、追いついていない」というが、約5ヶ月間で4勝、しかも同期最多の4連勝という戦績は決して恥ずかしくない。遅れを取り戻すための時間も実力も、彼にはこれからたっぷり用意されているのだから。

●オフコミ談話室「審判員の巻」は、次号掲載とさせていただきます。ご了承ください。

CLIP BOARD

開催日程のお知らせ

Racing Schedule

1月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
船橋											船橋(市)5											船橋(市)5									
川口		川口(市)5																川口施(市)6					川口(県)6								
浜松		浜松10													浜松10									浜松施4							
飯塚		飯塚9													飯塚9							飯塚10GIII九州選手権									
山陽 12/31~	山陽9(12R)										山陽10								山陽10					山陽施5							
伊勢崎		伊勢崎10													伊勢崎10							伊勢崎施4									

Racing Schedule

2月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28			
船橋	場外(県)												船橋(県)8 GIIウインターカップ争奪戦									船橋(県)6									
川口	川口(市)5SG第11回全日本選抜							川口(県)6							川口(県)6																
浜松	場外										浜松施5										浜松11							浜松11	~3/3		
飯塚	場外										飯塚10 GI開設記念レース										飯塚11 GIIIジュニア選手権							飯塚11	~3/3		
山陽	場外														山陽11							山陽11									
伊勢崎	場外										伊勢崎11GIIはやて賞争奪戦										伊勢崎11							伊勢崎12	~3/2		

Racing Schedule

3月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
船橋					船橋(市)6						船橋(市)6						走路等改修~4/30														
川口	川口(県)7SG第12回スーパースター王座決定戦							川口(県)7GI開設記念レース																							
浜松 2/28~	浜松11			場外			浜松12 GII春のスピード王決定戦														浜松12										
飯塚 2/28~	飯塚11			場外			飯塚12							飯塚12							飯塚12										
山陽	山陽11			場外				山陽12							山陽施6						山陽12GII山陽王座決定戦(12R)										
伊勢崎 2/28~	伊勢崎12						伊勢崎施5							伊勢崎12							伊勢崎12										

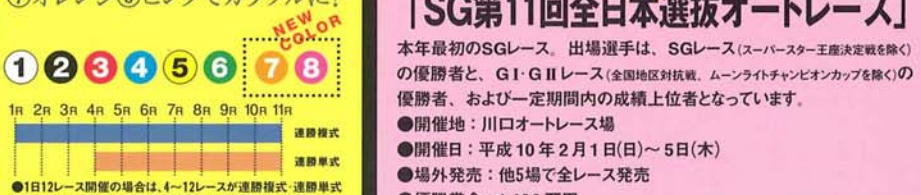
●施＝施設改善レース　●┆┆＝場外発売

Machine Sports Autorace 88 1988 APRIL START

オートレース新世紀。
4月から8車8枠制スタート!

オートレースはこれまでの8車6枠制に代わり、平成10年4月から全場で8車8枠制へ移行します。従来の①白②黒③赤④青⑤黄⑥緑に加え、⑦枠のオレンジ⑧枠のピンクが追加されレース場がさらにカラフルに。これにともなって8枠制の連勝式となり、1R～3Rが連勝複式のみ、4R以降最終レースまでは連勝複式・連勝単式が併売されます。この制度改正で、車券の組み合わせバリエーションが増え、ますますオートレースが楽しくなること請け合い。いっそう春が待ち遠しくなります。

⑦オレンジ⑧ピンクでカラフルに!



●1日12レース開催の場合は、4～12レースが連勝複式・連勝単式の併売となります。なお、単勝・複勝も従来通り発売されます。

●オートレースホームページアドレス　http://www.autorace.or.jp/

プレゼントコーナー

本号「黒潮列伝」に登場の片平巧選手のサイン色紙①、SG第1回オートレースグランプリテレホンカード②をそれぞれ10名様に抽選でプレゼントします。官製はがきに、郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、希望の景品の番号、オートレースまたはSPEED STARに関するご意見等を記入し、下記編集部までお送りください。締め切りは1月31日(当日消印有効)。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

②SG第1回オートレースグランプリテレカ

①片平選手サイン色紙

冬の川口でSGレース2連発!

「SG第11回全日本選抜オートレース」

本年最初のSGレース。出場選手は、SGレース(スーパースター王座決定戦を除く)の優勝者と、GI・GIIレース(全国地区対抗戦、ムーンライトチャンピオンカップを除く)の優勝者、および一定期間内の成績上位者となっています。

●開催地：川口オートレース場
●開催日：平成10年2月1日(日)～5日(木)
●場外発売：他5場で全レース発売
●優勝賞金：1,400万円

「SG第12回スーパースター王座決定戦」

SGレースの優勝者に加え、各地区における一定期間内の成績第1位・2位選手が出場。平成2年の第4回大会から昨年11回大会までは島田・片平の船橋勢が8連覇。さて、9連覇を阻むのは?

●開催地：川口オートレース場
●開催日：平成10年3月1日(日)～4日(水)
●場外発売：3/4(水) 1R～12R　浜松・飯塚・山陽
●優勝賞金：1,200万円
●出場選手：正選手16名
船橋：島田信廣、片平　巧、岩田行雄、阿久津正夫
川口：牛澤和彦、福田　茂
浜松：鈴木章夫、鈴木辰己
飯塚：中村政信、永冨高志
山陽：岡松　忠、畑　吉広
伊勢崎：髙橋　貢、田代祐一、清水　卓、青山文敏

次号は、4月上旬頃発行予定です。　編集・発行●日本小型自動車振興会内「スピードスター」編集部　〒100 東京都千代田区内幸町2-1-4　TEL.03-3503-6427　オートレース Auto Race